

# 樋ノ口遺跡

弥生・古墳時代水路の発掘調査



調査区全景（北から）

1986

津山市教育委員会

## 序

津山市教育委員会は、市内総社地区を中心に位置する美作国府跡について、急激に進行する宅地化に対応する緊急発掘調査をこれまで数回にわたって実施してきました。今回の調査も同様の調査の一環として取り組んできたのですが、弥生時代から古墳時代にかけての水路跡が検出され、予想外の成果を得ることができました。特に、木製農耕具類の発見は、頗るみられる遺構の確認と共に、これまで集落遺跡や墓地遺跡からしか伺うことのできなかった当時の生き生きとした生活に一歩近付いて見ることを可能にしました。地域の歴史を知るうえで、これらの資料が役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり理解と協力をいただいた良互薬品株式会社および関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和61年3月31日

津山市教育委員会

教育長 福島祐一

## 目 次

I 調査の経過	1
II 遺 跡	2
III 遺 物	4
IV 結 語	9

## 例 言

- 1 本書は、良互薬品株式会社が岡山県津山市小原7-1番地他に計画した事務所建設に先立つ事前調査として津山市教育委員会が主体となって1985年に実施した桶ノ口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は津山市教育委員会社会教育課が担当し、調査および資料整理は安川豊史が行った。
- 3 本書に使用する方位は磁針である。レベル高は海拔高を示す。
- 4 本書の執筆・編集は安川が行った。

## I 調査の経過

樋ノ口遺跡は、津山市街地の北方約1.5kmの平地に位置し、行政区画は津山市小原樋ノ口7番地を中心とする弥生時代から古墳時代の遺跡である。本遺跡発見の契機となったのは、1982年から翌年にかけて津山市が実施した市道総社・小原線改良工事にともなう発掘調査で、この調査で、弥生時代の自然河道の一部が確認された。本地区は美作国府域内に推定されているが、国府に伴うとみられる若干の遺物が検出されたものの、国府関連遺構は確認されなかった。これは中世期に属すると思われる一帯の大規模な水田造成によって当時の遺構面が削平を受けたことにも起因すると考えられる。このように、遺跡は厳密には弥生時代から中世までの複合遺跡といえるのだが、その主体をなすのは弥生・古墳時代の自然河川である。従って、本地区を従来の美作国府跡という名称で呼ぶことは実態に即きないので、新たに小字名をとって樋ノ口遺跡と命名した。

今回の調査は、良互薬品株式会社による事務所建設に先立つもので、1985年4月に工事対象地内の確認調査を実施した。A・B・Cの3地区の内、A地区で旧河道遺構面を検出し、これについて1985年7月1日から7月16日までA地区の旧河道の発掘調査を実施した。調査面積は231m<sup>2</sup>。

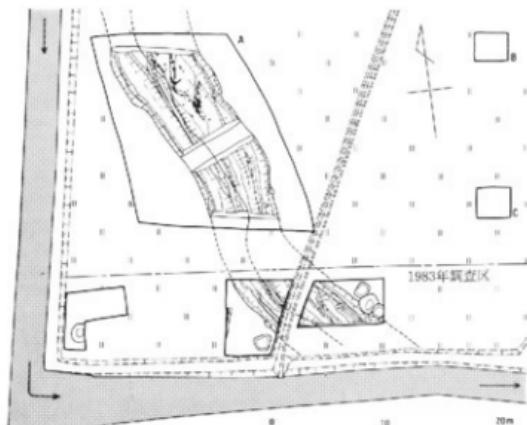


第1図 遺跡位置図（建設省国土地理院発行2万5千分の1地形図「津山東部・西部」から複製）

## II 遺 跡

北西から南東に重複して伸びた2本の旧河道が検出された。建物の予定位置にかかる範囲を調査し、調査区内の河道延長は、共に18mをはかる。SD 1は弥生時代に属し、SD 2は古墳時代に属する。

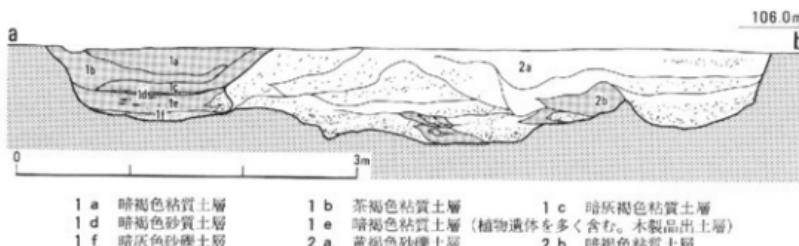
SD 1は現状で最大幅5m、遺構検出面からの最大深度0.9mをはかる。ただSD 2によって南西岸を切られており、本来の河幅は7m前後に達すると思われる。同様に上面の削平によって深度についてもかなり浅いものとなっているが、本来の深さは明らかでない。堆積土層は砂礫土が主体で、乱れた堆積状況を呈し、水流の激しさを物語っている。河底の北半部には合計300本



第2図 調査区域図

1:500

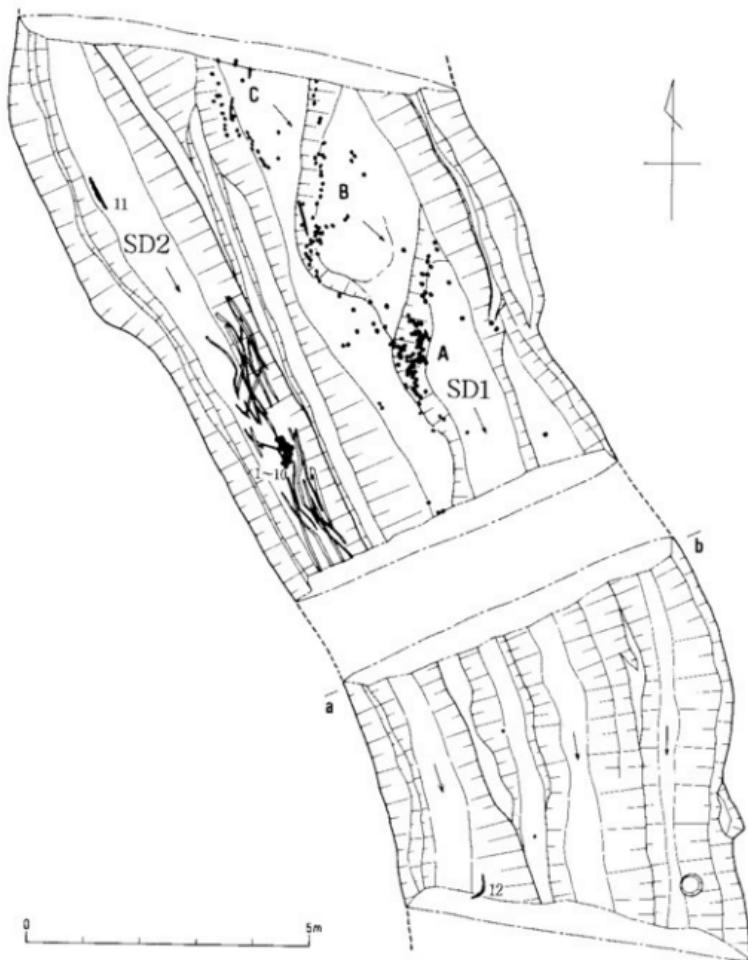
におよぶ木杭が集中して打ち込まれていた。さらに、これらは大きくA・B・Cのブロックに分かれる。何れも、流れに対して斜交する杭列をなすが、杭列の打ち込まれた上方箇所が高く盛り上がっているのに対し、下方は水流によって抉られている。従って、これらの杭列は激しい水流を統御する堰の一部であったとみられる。堆積土層中からは、前期から後後にいたる各時期の弥生土器が出土したのをはじめ、石器、杭に転用された農具が検出された。



第3図 SD 1・2 土層断面図

1:50

SD 2 は幅3.5~2.0m、深さ 0.7m をかる。SD 1 と同様に蛇行するが、SD 1 とは対照的に堆積土層は基本的に暗い色調の微砂質粘土層からなり、土層堆積も乱れず、當時滞水した淀んだ流れが復元される。これを示すように特に I c 層中からは多くの植物遺体と共に若干の木器が検出された。他の遺物としては、SD 1 と同様に各時期の弥生土器片と石器が少量検出されたほか、1 個体に復元される古墳時代の土師器甕が I c 層中から出土した。



第4図 SD 1 + 2 平面図

1 : 100

### III 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、土器、石器、木器等があるが、その大部分は S D 1・2 から出土したものである。他には、造構検出面の上を覆っていた厚さ20cm程の中世の造成土層中から古代—中世の土器と瓦片がわずかに検出されたにすぎない。

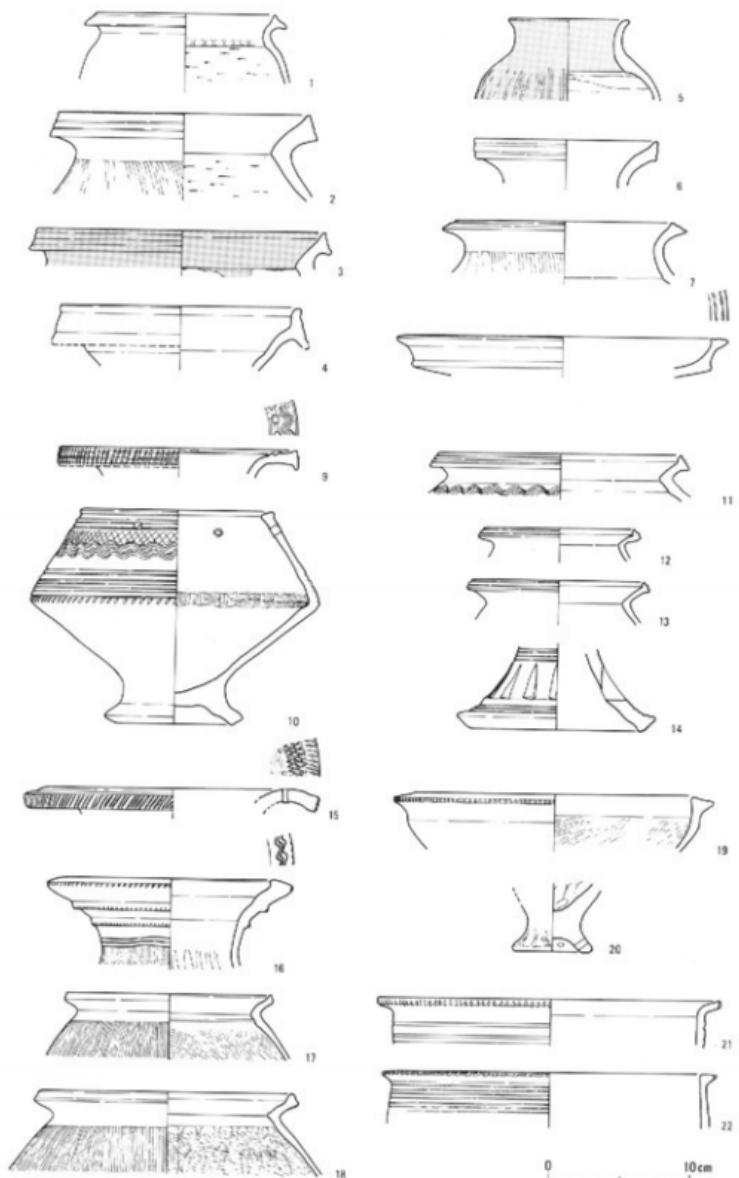
**土 器** (第5・6図) S D 1・2出土の弥生土器は、ほとんどのものが破片となっていて摩滅しているが、その程度は少なく、すぐ近くに当時の集落が存在したことを示している。破片数を時期的にみれば S D 1・2とも中期、後期、前期の順に多い。S D 1では後期中葉までの土器が存在するのに対し、S D 2では後期終末から、さらに古墳時代の土師器まで認められ、ふたつの水路の所属時期の違いを示している。

第5図は S D 1出土の弥生土器の主要例で、1～8が後期、9～20が中期、21・22が前期に属する。後期では1～3・7が壺形土器、5・6が壺形土器、4が器台形土器、8が高壺形土器であるが、3は器表に赤色顔料の付着が認められ、壺形土器として用いられた可能性がある。このうち、7・8は後期前葉に、他は中葉に属すると思われる。中期の土器のうち、9～14は後葉、他は中葉に属する。9～11・15・16が壺形土器、12・13・17・18が壺形土器、14・19が高壺形土器、20が鉢形土器である。10は弥生土器では唯一、完形に近く遺存していたものである。21・22はいずれも前期の壺である。

第6図23～27は S D 2出土土器の主なもので、24～27は弥生時代後期、23は古墳時代に属する。23は木器11の2m南方の壁面近くで1e層中から出土したもので、木器の所属時期を示すものである。やや縦長の球形に近い胴部に外方に折れ曲がった短い口縁部を持ち、端部は面をなす。器表は新鮮で、胴部外面中央と底部付近の内面に炭化物の厚い付着が認められる。内面の炭化物中には穀粒状の斑痕が多く観察される。他に古墳時代の資料は未検出で、この壺の詳細な所属時期は不明だが、ここでは5世紀頃と考えておきたい。後期弥生土器は、前葉から後葉までみられる。29は出土箇所の不明な小形丸底土器で、S D 2出土の可能性が高い。

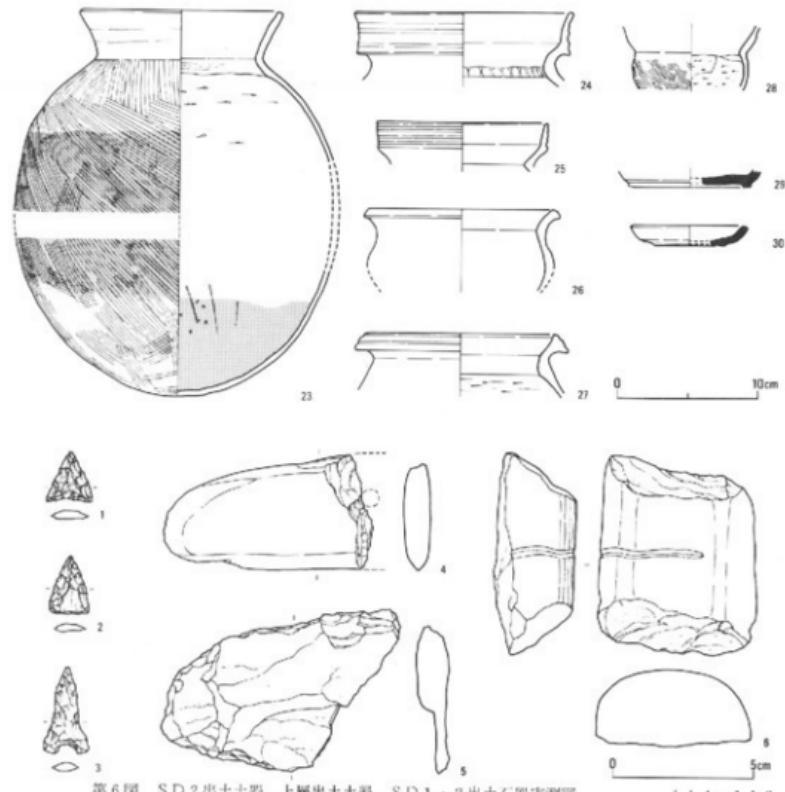
29・30はいずれも S D 1・2 が完全に埋まつた後に堆積した土層中から出土したもので、29は奈良時代後期から平安時代初期にかけての、30は中世の須恵器である。

**石 器** (第6図1～6) 1～3・5は S D 1、他は S D 2 から出土した。1～3はサヌカイト製の石鏟で、3は他の2点に比べて摩滅が激しく、その特徴的な形態からも縄文時代に属すると思われる。4・5は片岩製の磨製石包丁およびその未製品の破損したものである。6は磨製石斧あるいは棒状石製品の破片を再利用した石錘と考えられるもので、中央部に浅い切込みをいれている。このほかに若干のサヌカイト剣片や碎片が出土した。



第5图 SD 1出土弥生土器类测图

1 : 4

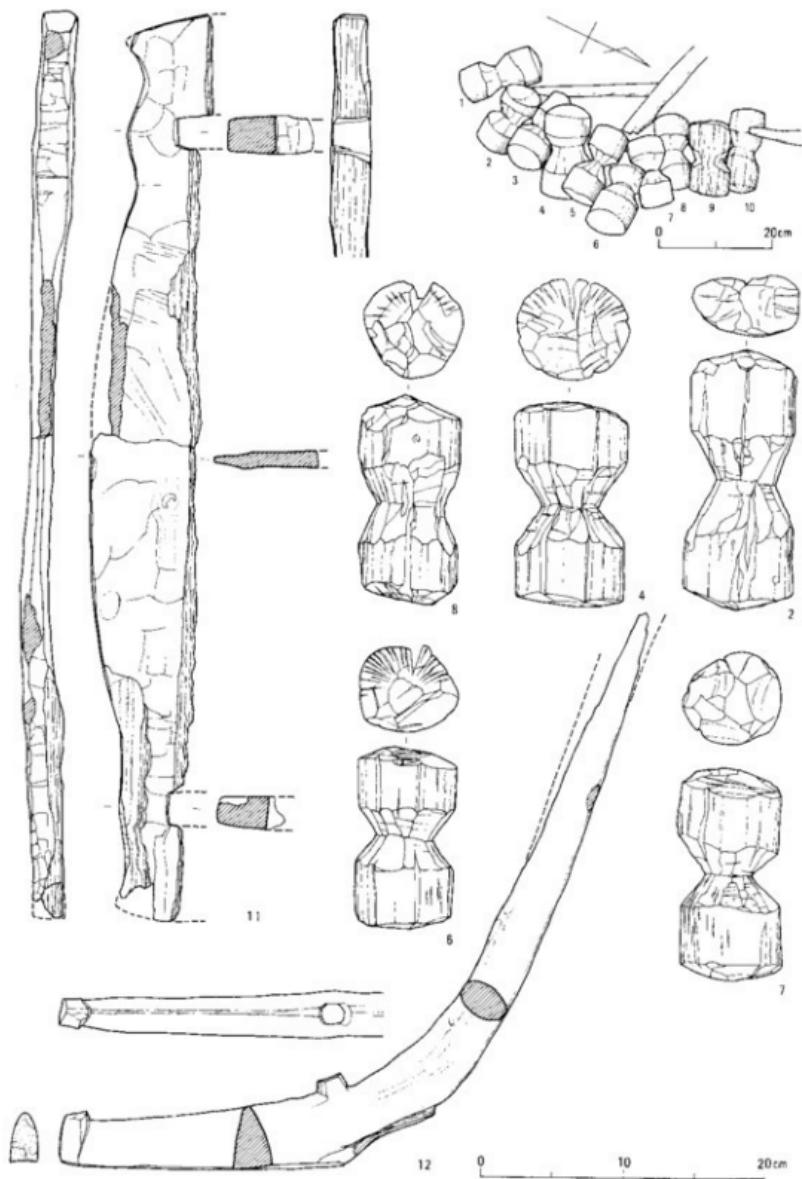


第6図 SD 2出土土器、上層出土土器、SD 1・2出土石器実測図

1:4、1:2

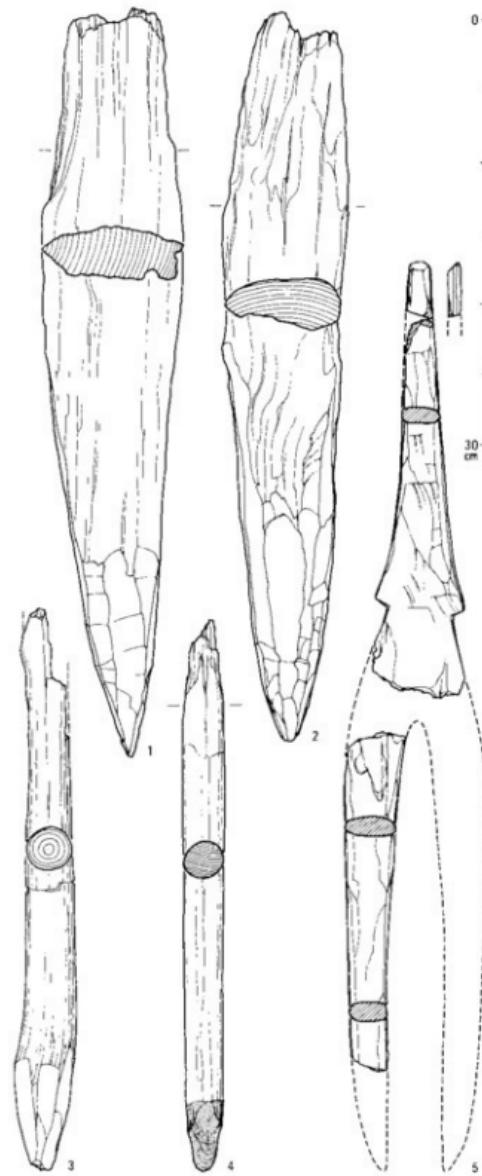
**木 器 (第7・8図)** 本遺跡から出土した木製品には、農耕具、蘿編具、杭がある。SD 1出土の木製品は、全てが杭として利用されていたのに対し、SD 2では杭は検出されなかった。これらの木製品の樹種鑑定は未了で、現状ではそれぞれの樹種を明らかにできない。

SD 2出土の木製品 (第7図) は12点ある。鶴の子と呼ばれる蘿編用具 (1~10) が10点、大足状木製品 (11) と着柄鋤の柄部 (12) が各1点である。蘿編具は、皮をむいた丸太材をそのまま分割し、中央に抉りを入れて両端を整えたもので、10点が一括して廃棄されていた。抉りの部分には紐通し穴は穿たれていないが、中央部を紐で結わえて一括保管した状態が出土状況からうかがえる。長さ11.6~17.9cm、直径 5.8~7.8cm、含水重量 260~490g をはかり、広葉樹製。大足状木器は中央部で縦に割れており半分を欠損している。両端近くに四角い枘穴が穿たれ、中央部は薄く幅広くつくられている。長さ64.4cmとやや大きいこと、紐通しの穴が無いことから確実に大足とは断定できない。広葉樹製。鋤柄は、枝材を曲げて加工を施したもの



第7圖 SD 2出土木器実測図

1 : 4



第8図 SD 1出土木器実測図

1:4

で、類例からみてナスビ形鋤先に着柄されたものと思われる。装着の際の紐止用に先端と屈曲部に突起を彫り出している。中央から手元側を欠失しており、全体の形状は不明である。

SD 1出土の杭（第8図）は杭として作られたものと、他の木製品を転用したものとに分けられる。現状では後者は4・5の2点が認められるだけで、他はすべて専用品であるが、全部の検討が未了なので多少増加する可能性はある。専用品の杭は丸太材を分割して作るもの（1・2）と、そのまま利用するもの（3）がある。分割するものでは放射状に木取する（1）のが普通だが、太い原材を利用した場合はそれをさらに分割するもの（2）もみられる。広葉樹製が多く認められるが、樹種はさまざまである。

4は柄状製品で、かなり太い針葉樹を加工して作られている。一端に焼き切れた痕があり、これを先端にして地中に打ち込まれていた。5は二又鋤である。中央部の折れた箇所を上にして近接して打ち込まれていた。表面には鉄製と思われる工具の刃こぼれによる条痕をとどめる。

復原長64.6cmで広葉樹製。

## IV 結 語

S D 1 および S D 2 の水路は、織り返し述べたように自然流路であり、本遺跡に隣接して南下し直角に折れて東進し折れ曲がって更に南下する小原川のかつての流路であったと思われる。S D 1 は幅 7 m にも達すると推定され、旧小原川と呼ぶのにふさわしい規模を持つが、S D 2 の段階では川幅は著しく狭くなり、水流も停滞しており、その時点での本流は他の地点にもとめられる。S D 1 にみられた杭列の性格については、先に述べたように井堰と考えられるが、S D 2 に杭列が認められないのはこのような水路の変化にもとめられる。

杭列の特徴をまとめれば、第 1 は水流に斜交した杭列をなすことで、これは比較的急な流れに対処したものといえる。特に杭列 A では、杭は 1 列ではなく、何重にも密接して打ち込まれていたにもかかわらず、杭は全体に水流による傾きをみせていた。第 2 はこうした杭列が調査区の北方に集中しながらも A ~ C の 3 群が認められたことである。これらの杭列が相互に関係をもつことはいうまでもないが、A の南端から C 北端までの距離は現状で 8 m をばかり、C がさらに北に伸びることを考えれば、それぞれ別の取水路に伴うと考えるのが妥当であろう。また、A の南方 20 m の地点でも 1983 年の調査の際、杭列が検出されており、この自然流路が農業用水の基幹水路として盛んに利用されたことを示している。

これらの杭列群の所属時期については、これを直接示す資料は現状では無い。従って、出土土器から弥生時代前期から後期中葉までの幅を考えざるを得ない。しかし、前期および中期前葉の土器片が僅少であることからみて、現状では中期中葉から後期中葉までにしばられる可能性が高い。

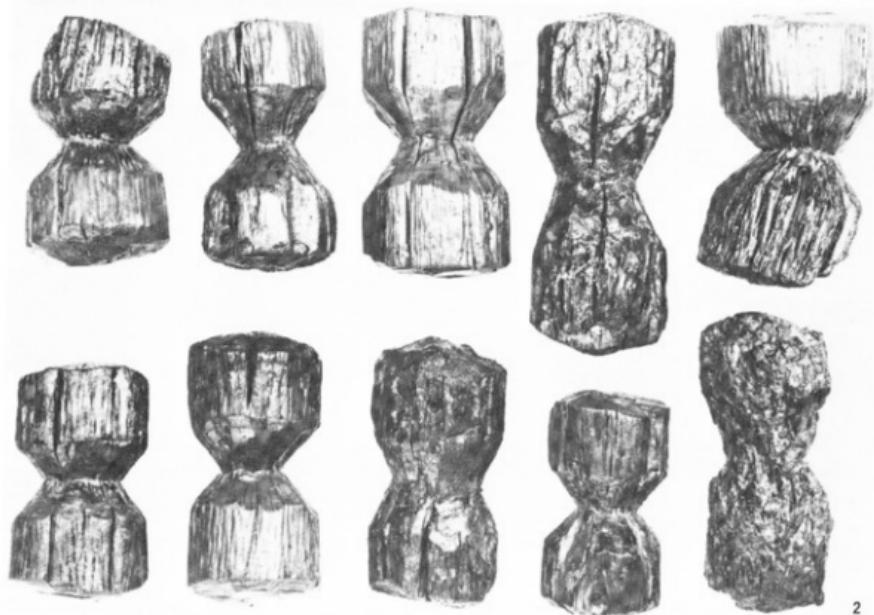
これは周辺の弥生遺跡の分布状態からもうかがうことができる。すなわち、本遺跡周辺の弥生前期の遺跡では、樋ノ口遺跡の約 400 m 南方の一丁田遺跡とそれに隣接する高橋谷遺跡(注 1) があげられる。後者は弥生時代の拠点集落の一つとみられているが、いずれも前期土器の出土量は比較的少なく、現在のところ遺構は未発見である。これに対して、高橋谷遺跡では中期中葉から遺物の出土量が増加し、それに伴い中期後葉からは住居遺構が検出されるようになる。このことは樋ノ口遺跡の東方、宮川をはさんだ対岸の京免遺跡(注 2) でもほぼ共通し、中期後半になって遺跡数の激増する津山市内における弥生遺跡分布の動態と対応している。津山における弥生前期の生産活動の実態はなお不明な点が多いとはいえ、農業生産が本格化するのは中期中葉以降とみるのが妥当であろう。従って、本遺跡でみられる井堰群は水利の面から農業生産の盛行を示すものと評価される。

本遺跡出土遺物の内、木製農具類は市内では初めての発見である。このうち弥生時代に属するものには二又鋤があり、古墳時代に属するものに大足状木器、鋤柄、薙編具がある。大足状木器以外は県下でこれまでに類例が発見されている。県下出土の木製農具類のうち弥生・古墳

時代に属する農耕具に限定してみれば、現在までに7遺跡、合計23点が検出されている。岡山市百間川原尾島遺跡出土の鍬先として報告された弥生前期に属する例を最古に、同遺跡出土の古墳時代後期の鍬先にいたる各時期のものが知られているが、全体の出土量が少ないうえ、落合町下市瀬遺跡を除けば出土遺跡が県南平野部に集中しているため、詳細な型式分類や水田類型による分化等の把握は今後の課題として残されている。従って現段階では本遺跡出土の農具類もこうした現状に新資料を追加するにすぎないが、弥生中期中葉～同後期中葉に属すると推定した二又鋤は、岡山市小橋法目黒遺跡の中期後半例から百間川沢田遺跡等の古墳時代前期例までにみられる從来の出土傾向に一致している。また、鍬柄については滋賀県針江中遺跡において初めてナスビ形鍬先と共に検出され、その性格が確認されたものだが、県下で1例だけ既知の資料が存在する。百間川原尾島遺跡出土のこの資料は古墳時代後期の溝から検出されたもので全長が78cmと比較的短いため、報文中では大鍬の柄の未製品の可能性が指摘されているが、針江中遺跡例と先端部の形状が酷似するほか、植ノ口遺跡例も含めれば所属時期も互いに近接しており、鍬柄としての再検討も必要であると思われる。

#### 注

- (1) 桶月壯介・近藤義郎「津山市山北・丁田遺跡」（『津山弥生住居群の研究』津山郷土館考古学研究報告第2冊）1957年
- (2) 中山後紀ほか「大山十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 1981年
- (3) 中山後紀「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 1982年
- (4) 正岡勝夫ほか「百間川原尾島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 1984年
- (5) 新東晃一・田仲満雄「下市瀬遺跡」（『中国概観白動車建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3）1974年
- (6) 家田淳一・吉村健ほか「岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 1985年
- (7) 二宮治夫ほか「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 1985年
- (8) 尾崎好則・山口順子・兼康保明「針江中遺跡の調査」（『国道161号線バイパス開通遺跡調査概要3』）1983年



1 SD 1 枕列 B・C (東から)、2 SD 2 出土萬編具

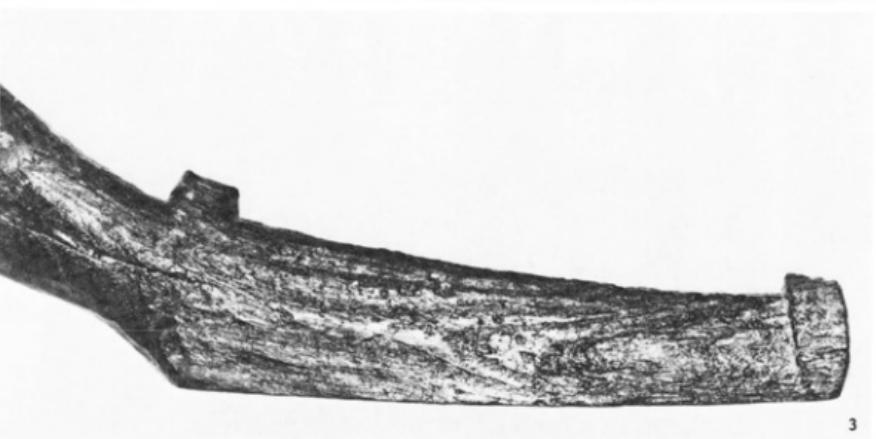
2 1:3



1



2



3

1 SD 1 出土大足木器、2 同器柄、3 同部分



4

5a



10

1·2 SD 1出土木杭、4 同柄状製品、5 同二叉鏟、10 同甌生土器（中期）

1·2 1:4, 4·5 1:3

樋ノ口遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第二〇集

津山市教育委員会

---

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第20集

樋ノ口遺跡

1986年3月31日

発行 津山市教育委員会  
(津山市山北520番地)

印刷 有限会社 弘文社

---